



震央分布図

2008年

5月1日

}

5月31日

マグニチュード

○ ≥ 5

○ ≥ 4

○ ≥ 3

○ ≥ 2

○ < 2

地震数

313回

気象庁・大学・
防災科学技術研
究所の資料を基
に作成

岩手・宮城内陸地震は14日朝、東北地方を突如襲いました。大規模な地すべりや土石流で、多くの尊い命が奪われました。気象庁によると、活火山である栗駒山の東のふもとが震源でマグニチュードは7.2、余震域は、北上低地西縁断層帯南部の出店断層付近から鬼首カルデラ付近まで、北北西-南南東方向に約30km延びています。

この地震は、山間部で発生する地震の恐ろしさをあらためて見せつけました。降水量が多く、気温変化が大きい日本のような地域では、岩盤の風化が進み、山地は崩れやすくなっています。大雨や大地震があると、普段は崩れなかった斜面でも、崩壊が発生します。今回のような内陸の大地震はめったに起こらないため、山間部でどう備えるかは今後の大きな検討課題です。

余震域北部は北上低地西縁断層帯の西側にあたり

岩手・宮城内陸地震

が、南部では付近に活断層は知られていませんでした。東北大や産業技術総合研究所が調査中ですが、これまで活断層が記載されていない場所で地震断層と考えられる地変が見つかっています。

東北地方の中央部には、今回の震源域以外でも、八幡平や岩手山、蔵王などの火山が南北に並んでいます。これまで内陸の大地震は、それらの火山体の間、火山の無いところで発生すると考えられていました。火山体はやわらかくひずみエネルギーをためないと考えられていたからです。今回の地震は火山の近傍であり、どうして発生したのかを明らかにする必要があります。全国の大学等の合同観測で多点の余震観測やGPS（衛星利用測位システム）の臨時観測が開始されており、それらの結果が重要です。

（飯尾能久・京大防災研地震予知研究センター教授）

＝毎月第3木曜日掲載